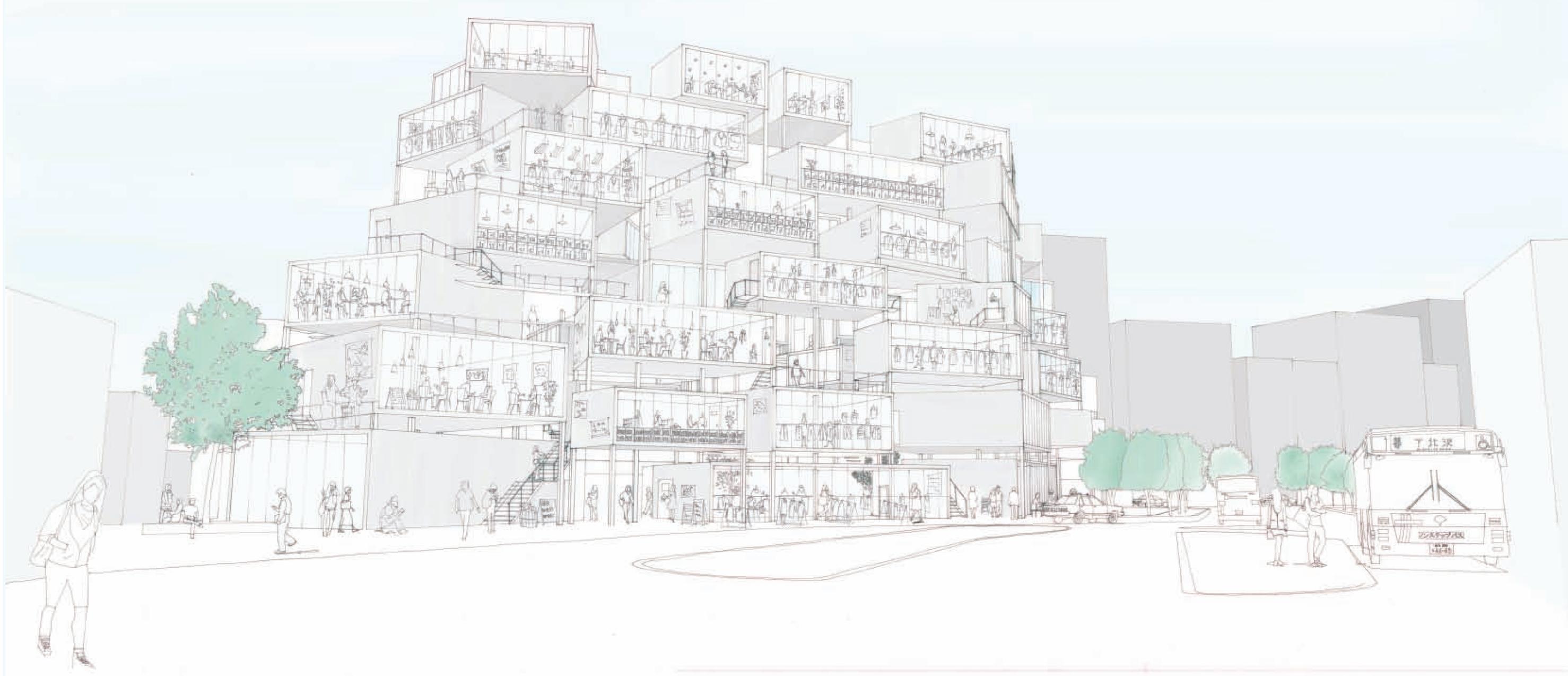


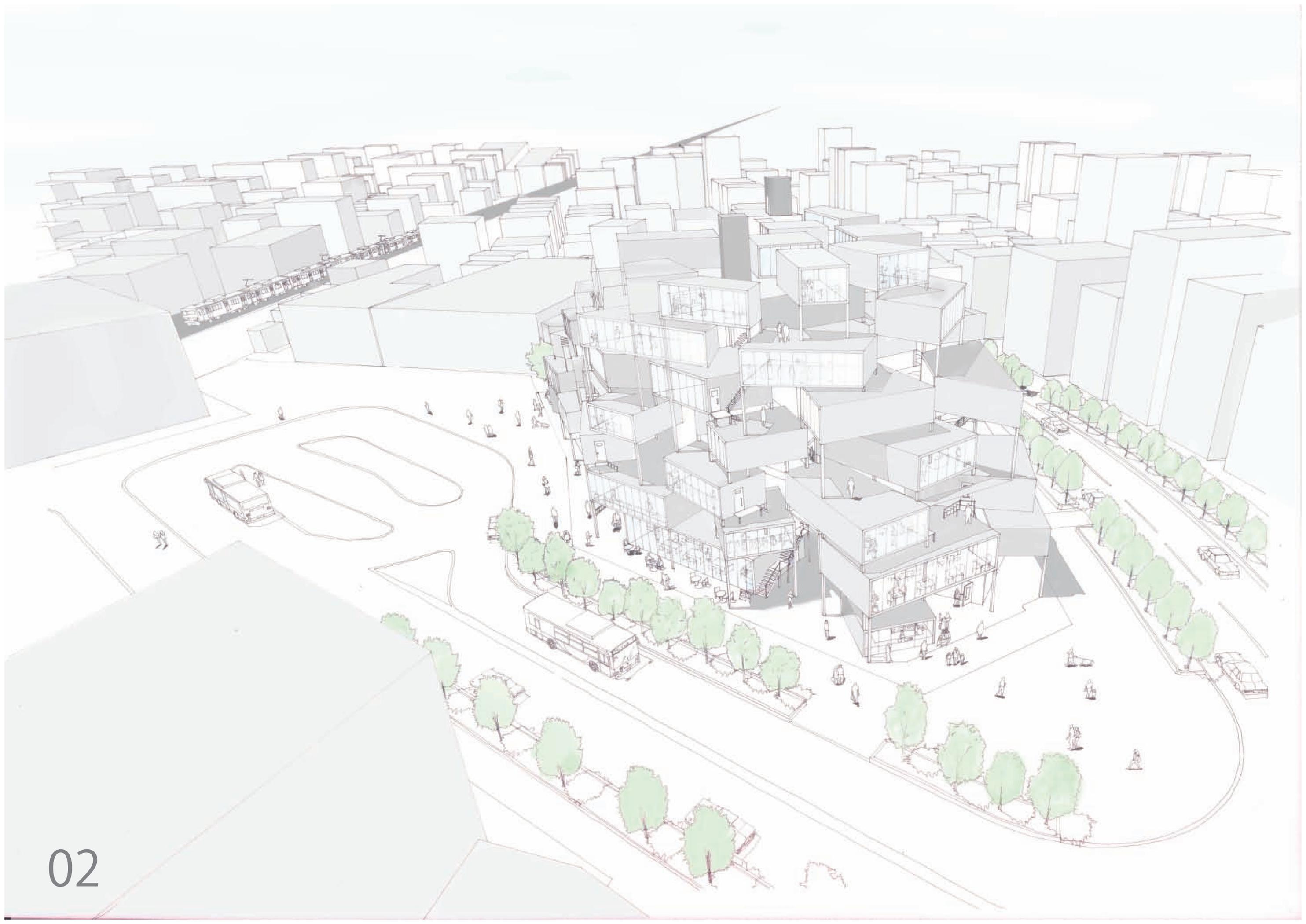
集 個 体

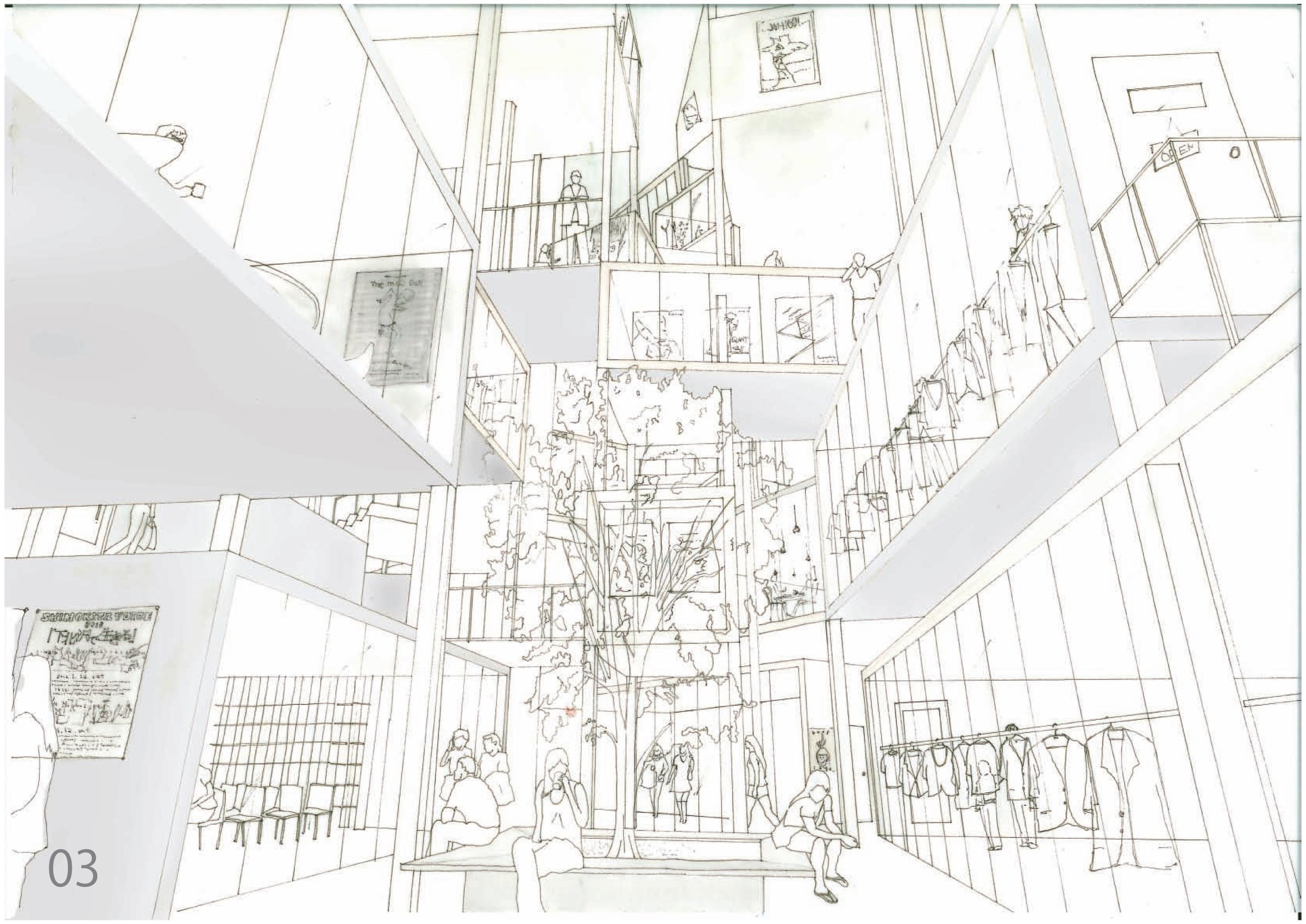
—趣味的空間の集積によって構成される駅前商業施設の提案—

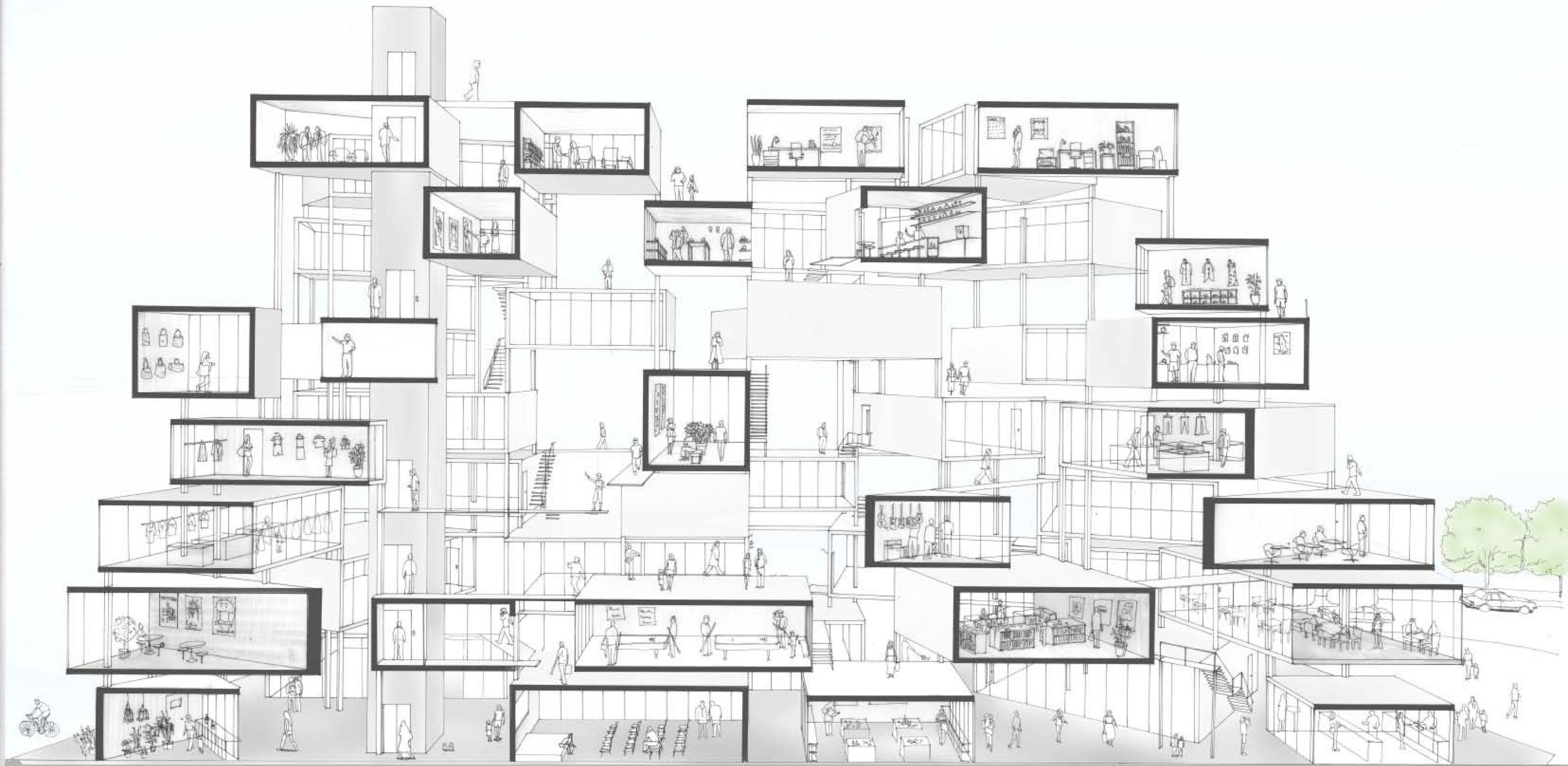


■_concept

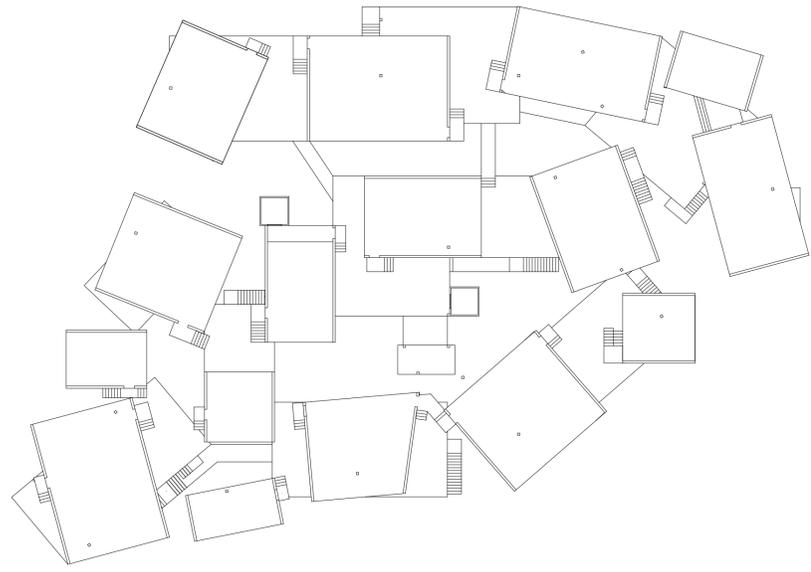
小田急線の複々線化に伴う道路計画によって街がダイナミックに変わろうとしている下北沢駅北口エリアにおいて「個人の趣味的空間」の集積によって構成されるテナント・オフィスの複合施設を提案する。











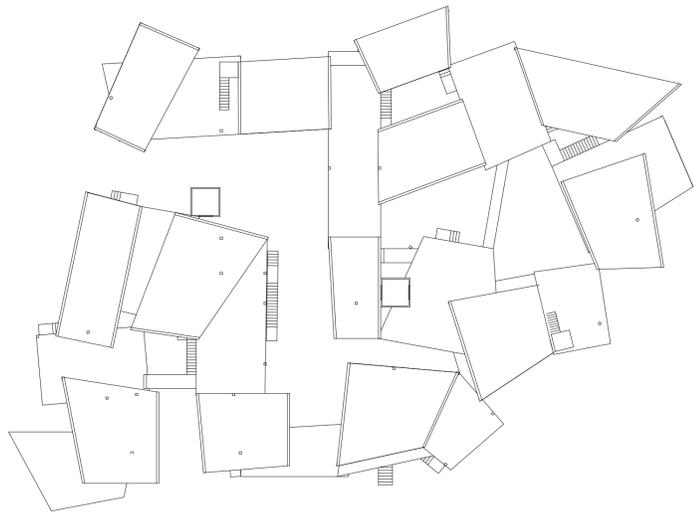
2F PLAN



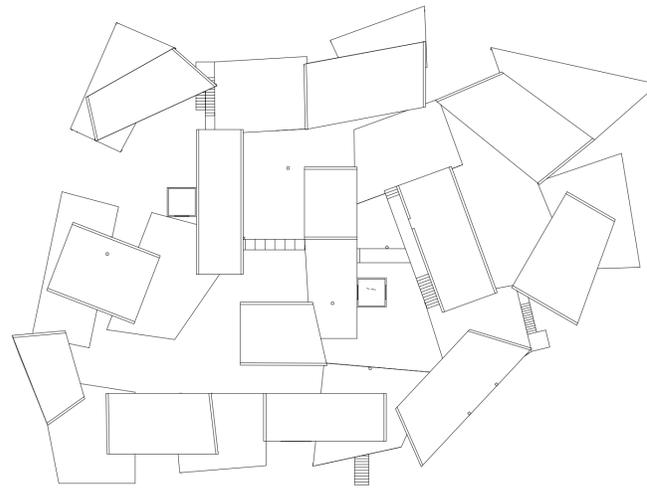
3F PLAN



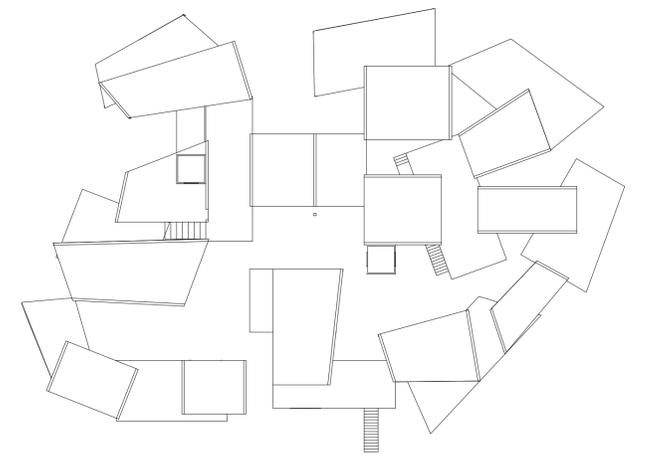
4F PLAN



5F PLAN



6F PLAN



7F PLAN

□_concept of design

共用部の考え方



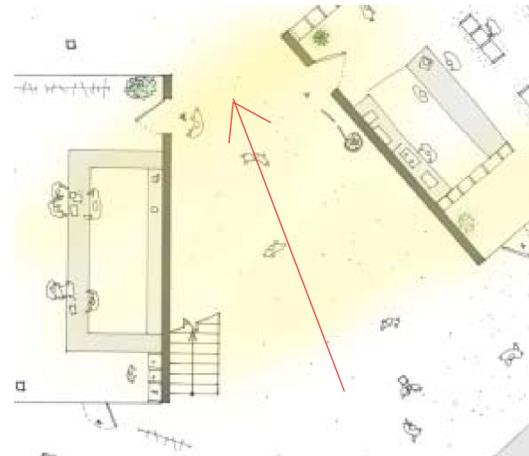
共用部はボックスとボックスをつなぐ動線であり、隣接する店舗の商品の陳列スペースであり、ちょっとした休憩スペースである。そこはボックスのオーナー、来訪者全ての人に開かれたポケットパークとなり、アクティビティが溢れだす。



エントランスの考え方



エントランスはボックス同士を傾けることによって奥行きを持たせるように計画する。このように奥行きを持たせることによって歩行者の視線を誘導し、向こう側の風景が見え隠れする。



動線の考え方



ボックスの外を通っても中を通っても各ボックスにたどり着けるように計画する。行き止まりになるボックスには滞在型のプログラムが入る（ex：美容院、カフェ）



□_consideration

「個」が街をドライブさせている

下北沢は小田急と京王という二つの鉄道会社の開発により発展を遂げた一方で、この街をドライブさせているものは「個」なのではないかと感じた。個人の趣味的空間—小さなカフェ、雑貨屋、古本屋、古着屋—が街の風景を創り出している。再開発により街の物理的構成は変化しても、そういったシモキタの「個」性は残していきたい。そして、それは一つの建築によって可能なのではないだろうか？



趣都の象徴としてのレンタルボックス

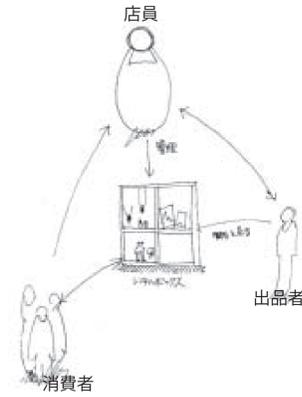
レンタルボックスとは、月額いくらかで小さなハコを借り、そこに自分が作ったアクセサリ、雑貨、本、CD等を展示、販売するシステムのことである。下北沢にはレンタルボックスが多い。それは趣味が表出している都市つまり「趣都」としての下北沢を象徴しているように思う。そしてそれは建築を作る指針になりえると思う。



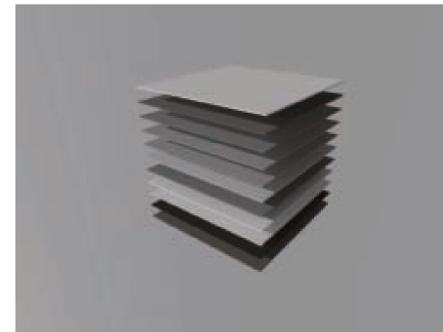
□_concept of design

レンタルボックスのような建築はつくりえないか。

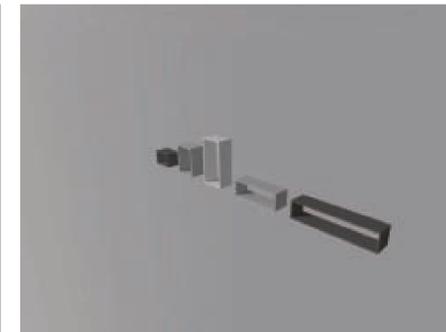
レンタルボックスを借りる人のモチベーションは「表現を通じて人と繋がりたい」という欲求からきているのではないか。そういった表現行為と商業が交わる趣味的空間としてのテナント・オフィスを提案する。



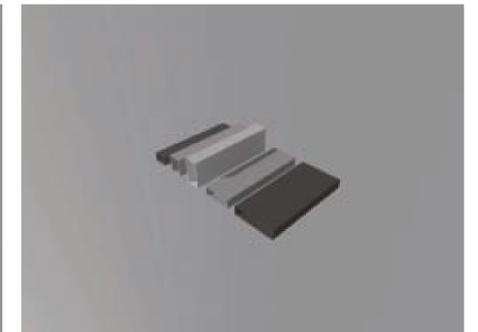
レンタルボックスの形態をモチーフに、ボックスの積層で建築を作る。ボックスの1つ1つのスケールを操作することによって様々な形をつくり、そのユニットにより全体を構成する。



既存の層構成による建築の作り方を少し変え、ボックスにより空間を設計する



ボックスのスケールを操作することで、用途に合った空間を作り出す



ボックスの奥行きを操作することで、チューブ型の空間を作ることができる

そういった形態のロジックにより組み立てられた建築では従来の層の積層では生まれえない空間を生み出す。テナントのオーナー、働く人、訪れる人、通り過ぎるだけの人、それぞれに対して刺激的な空間を作り、新しい下北沢駅前の賑わいを創出する



□_site reserch

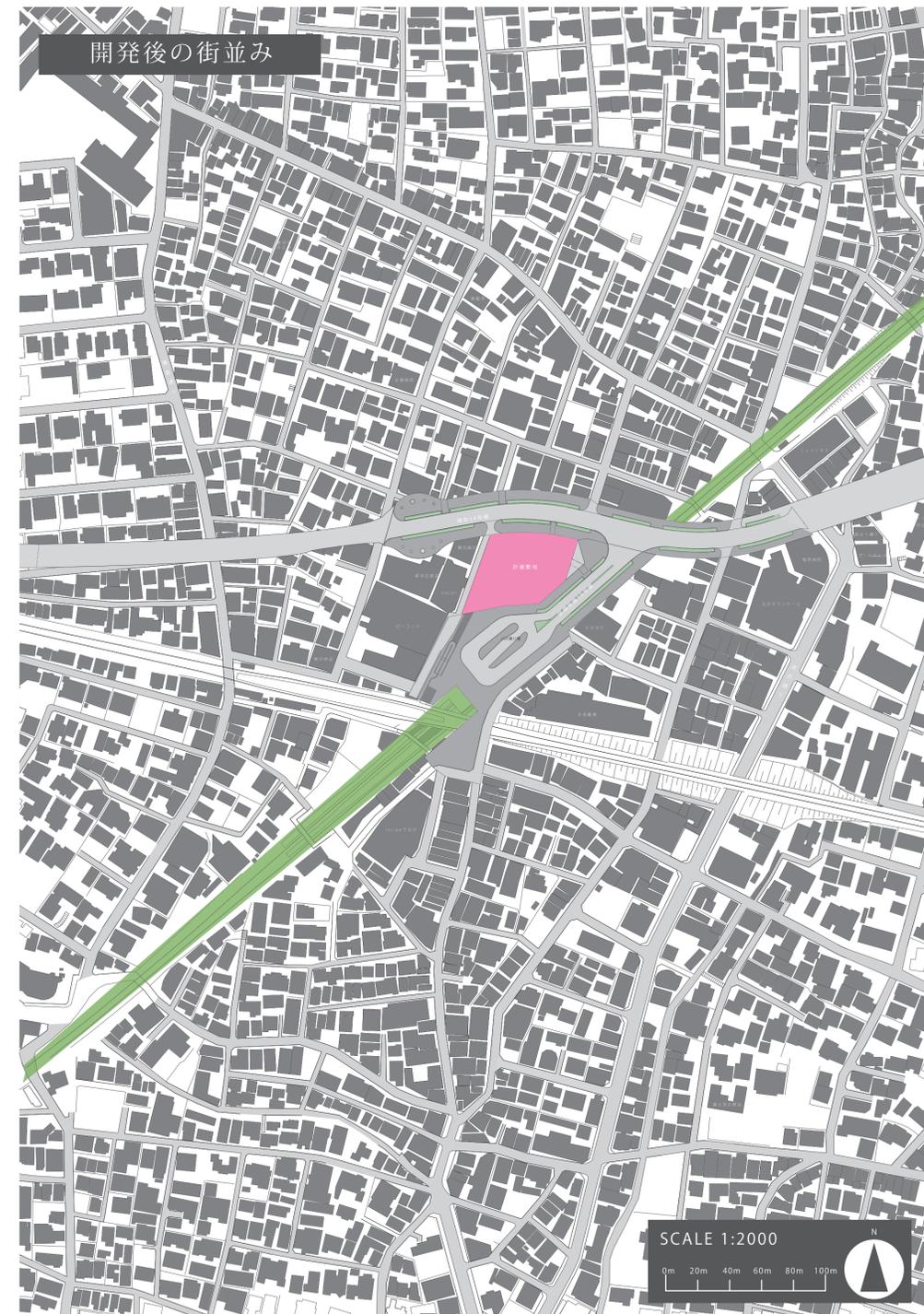
物理的特性 (physical existence)

- 緩やかな丘陵地に低層の建物が高密度に建つ
地権者が個人であるため法規上は高層化できる土地でも
予算上高層建築を建てることができなかった
- その一方で高層の建物も点在している
- 2本の私鉄がX状に交差し、それらが街を分断している

歴史、文化的特性 (historical continuum)

- 戦災を免れたことにより闇市が発展し、商業地としての礎を築いた
- 米軍の駐屯地であった代々木から近く、アメリカ文化が流入した
↓
古着屋、輸入雑貨店、ロック・ジャズバーの発生の主要因
後の劇場街化、若者の街化への直接的な要因と考えられる

2000	初麗村・タケノコや茶などの産地として栄える
1923	関東大震災を契機に人口増加
1927	小田急線の開通・近郊住宅地化が進む
1933	井の頭線の開通
1950	戦時中の闇市を端緒とする駅前市場の繁栄
1960	経済成長に乗じて買い物の街としての発展が加速
1962	人口がピークに達する
1964	環状七号線の開通
1979	下北沢音楽祭が開催される
1982	本多劇場がオープン



北口エリアの様子

個性的な店舗が多い下北沢は、商品やPOPが表出しており、それが街の風景を構成している。
↓
個人の趣味的空間が街の風景を創り出している



□__motivation

道路計画により街の構造が大きく変わろうとしている下北沢において、再開発を受け入れながらも街の記憶を後世に繋ぎ留められるような建築はつくれないか。

□__background of issues

小田急線の地下化(複々線化)を契機として二つの道路計画(補助54号線、区画街路10号線)が浮上した。

それは下北沢の北口エリアを南北に分断化してしまう大胆な計画であることから、周辺住民やシモキタ愛好者の間で反対運動が起きている(代表的な団体として「Save The 下北沢」が挙げられる)。

その一方で地権者の多くは計画を受容しており、下北沢北口エリアが再開発されることは確実となった。

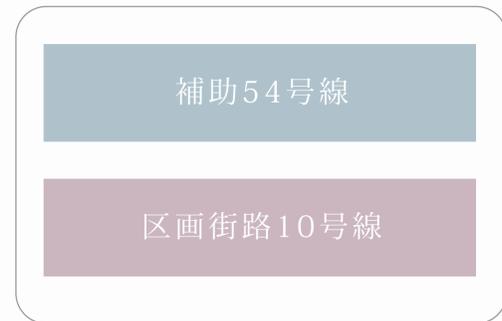


開かずの踏切問題解消



建運協定(1969年) 鉄道と幹線道路が350m以内で2か所以上交差すれば、事業費の9割を道路特定財源で賄える

2006年事業認可
二つの道路計画



- ・北口エリアの分断化
- ・再開発による高層化
- ・個人事業の撤退による個性の喪失

